



1 May 2016

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan

Newsletter No. 15

「真なるものはつくられたもの」

日本ヴィクトリア朝文化研究学会会長 川端 康雄

書き出しで一気につかまえられる本というのがある。初めだけよければいいというものではなく、尻切れとんぼで失望させられることもままあるが、小説であれ、批評作品であれ、読み出したとたんに著者の術中にはまって途中でやめられなくなる名著がある。若い時分に読んだ類はとりわけそのインパクトが永続的で、わたし自身の学生時代の読書体験でいまでもありありと思い起こされる評論・研究書を二、三挙げるなら、エーリッヒ・アウエルパッハ著『ミメーシス』(1946年)での「オデュッセウスの傷痕」の挿話の導入部(これは筑摩叢書版の篠田・川村訳で読んだ)、フランシス・イエイツ著『記憶術』(1966年)で詩人シモニデスがカストルとポルックスの加護によって災害から逃れたことで場所(トポス)とイメージを基礎とする記憶術の創始者となっただけを語った魅惑的なプロローグ、そしてもうひとつが、若干ここで立ち入ってみたいエドモンド・ウィルソン著『フィンランド駅へ』(*To the Finland Station*, 1940年)で、フランスの歴史家ジュール・ミシュレがナポリの未知の思想家ジャンバッティスタ・ヴィーコ(1725-1804)の著作を見出して知的興奮を受ける、「ミシュレ、ヴィーコを発見」の書き出し、これが忘れがたい。

最後のウィルソンの著作の冒頭部分を岡本正明訳(みすず書房、1999年)で引用するところである。

一八二四年一月のある日のこと、哲学と歴史を講ずるフランスの若き教授ジュール・ミシュレは、読んでいた本の訳注のなかに、たまたまジョヴァンニ・ヴィーコの名を見いだした。ヴィーコにかんする言及にたいへん興味をそそられたミシュレは、何はともあれ、さっそくイタリア語の勉強にとりかかった。

ウィルソンのこの本は西欧革命思想の理論と実践の両面での歴史的展開を書いたもので、表題は1917年4月にロシア革命の指導者レーニン(1870-1924)を載せた封印列車がサンクト・ペテルブルグの「フィンランド駅」(フィンランドのヘルシンキ行きの列車の始発駅)に到着する場面をクライマックスとしていることにちなむ。ヴィーコに啓示を受けたミシュレから、ルナン、テーヌ、アナトール・フランスへ、そしてバブーフ、サン＝シモン、フーリエ、オウエンら初期「ユートピア」社会主義者をへて、主役のマルクスが登場、エンゲルスの支援を受けてマルクスの著作がヨーロッパ各地の革命集団のなかで次第に地歩を固めるさまが記述され、最後にマルクス主義の理論を実践しロシア革命を導くトロツキーおよびレーニンの活動が語られる。

1940年刊行のこの著作にかんして、ソヴィエトが人類史上最悪の独裁国家のひとつと化していたのを見抜けなかったとして、晩年のウィルソンはもっともな反省の弁を述べているのではあるが、本書の語り口が織りなす壮大な思想的ドラマの豊饒さは、いま読んでいささかも損なわれてはいない。原書の副題は意味深長にも *A Study in the Writing and Acting of History* となっている。ここで歴史を「書くこと」(writing)

と「行為すること」(acting)とを一つの定冠詞で統合していることに注意したい。思想家と運動家たちが「よりよき世界」を構築するためと信じ、生涯を賭しておこなった「歴史記述」と「歴史創造」の相互的な営みをウィルソンは事物に即した簡素平明な文体をもって、ひろやかな視野のもとに描き出している。

「ミシュレ、ヴィーコを発見」のエピソードに話をもどす。19世紀初頭ではヴィーコがイタリア国外では無名であり、ラテン語の著作は別にしても、代表作『新しい学』(1725年)をミシュレが読むためにはイタリア語を学ぶしかなかった。結局ミシュレ自身の手によってそのフランス語初訳が1827年に刊行される。いったいミシュレはヴィーコのどこに惹かれたのであったか。それはヴィーコの歴史哲学の肝となる「真なるものverumはつくられたものfactumである」という原理である。蓋然的知識を排除するデカルト的自然科学の原理にヴィーコはこれをぶつけ、歴史哲学の方法論を構築した。以下は『新しい学』の有名すぎるくだりであるが、これはミシュレに対してももっとも感銘を与えた部分であろう。

はるか古(いにしえ)の原始古代を蔽っているあの濃い夜の暗闇のなかには、消えることのない永遠の光が輝いている。それは何人たりとも疑うことのできない真理の光である。すなわち、この社会は確実に人間によって造られたものであるから、その原理は我々の人間精神そのものの変化様態のなかに求めることができ、またそうでなくてはならないことである。(ヴィーコ『新しい学』第一巻331節、清水純一他訳、『中公バックス 世界の名著33 ヴィーコ』所収)

ヴィーコにとっての歴史とは、人間にたちはだかるさまざまな自然的・人的障害を克服する努力をとおして、人間および人の手になる諸制度を絶えず自己変革しようとする営為にはかならなかった。それは「人間の」活動であり、「人間による」構築物の帰結なのだから、人間によって理解しうる(逆に、自然はそのようには理解しえない)。アイザイア・バーリンが『ヴィーコとヘルダー』で指摘したように、これがヴィーコならではの独創的な人文的学説であり、ミシュレに靈感を与え、マルクスに称賛された点なのだった。そしてここでの「人間」とは王侯貴族や武人など一握りの権力者や特権層だけを指すものではなく、むしろ市井の人びとを含み込んでいる。「ふつうの人びと」がもつ「英知」、すなわち「民の知」(la sapienza volgare)の意義を強調した点でも、後続の思想家たちに大きな影響を与えた。「下からの歴史」の系譜を探るならヴィーコにひとつの源泉があると言ってよいのだろう。

ここからまた個人的な思い出になるが、『フィンランド駅へ』をわたしが読んだのは1980年頃、ダブルデイ社のペーパーバック(「アンカー」叢書)の古書を購入して、主に通学兼通勤の中距離列車のなかでの読書だったのだが、糸綴じをろくにせず糊で済ませた粗悪な製本なものだから、読み出してまもなく背表紙がパキッと裂けてばらばらになってしまい、500ページを超える大部だったのが読み終える頃には10何冊かの分冊になっていた。『フィンランド駅へ』というタイトルを見聞きするだけで、混雑した車内で揺られながらひどい装丁の(しかし中身は傑作の)ページをたぐっていた(いや、それこそ文字どおり「読み破っていた」)ことが思い起こされる。

そうだ、さらに記憶の糸をたぐるなら、『フィンランド駅へ』を勧められたのは恩師の小野二郎(1929-82年)からなのだった。最初に挙げた『ミメーシス』も彼の比較文学講義の冒頭でレオ・シュピッツァーやクルティウスらと併せて教示されたのだし、ヴィーコとアウエルバッハの密接な関係についても注意を促してもらった。イエイツの『記憶術』にしても彼が晶文社の編集顧問として翻訳刊行に関与した『世界劇場』をまず読んでから取りかかったものなので、いずれも小野が導き手だったということになる。

明治大学駿河台校舎の旧大学院棟の四角い大テーブルを囲んだ談話室兼演習室は午後のゼミが終わるとしばしばそのまま酒席に転じることとなり、学生たちに加えて助手や他の教員(また時に編集者)も合流して談論風発の饗宴と化した。学生の身分ではふだん口にできないようなシングルモルトウィスキーやら吟醸酒やらに折々ありつく垂涎の機会でもあった。自由な雰囲気なのをいいことに、わたしをはじめ学生はずいぶん生半可なことをしゃべったものだが、小野にはそれを受けとめて返す鷹揚さがあった。愛用のブライヤーパイプをくゆらせながら楽しげに耳を傾ける別の教授の姿も思い起こされる。わたしの知るいまの大学世界を思うと隔世の感がある。本来の演習の時間に聞いたのだったか、それともある意味でより興味深い話が聞ける、くだんの「饗宴」の時間であったのか、定かでないが、小野はあるとき『フィンランド駅へ』について熱く語り出し、「時間があつたらいつか翻訳してみたい」と言ったのである。「ミシュレ、ヴィーコを発見」の出だし自体も、もしかしたらその際に彼が語っていたのかもしれない。

ヴィーコへの小野の関心も並々ならぬものであったと記憶するが、彼の著作でヴィーコについての論考はとくに見当たらない。ただしわたしの知るかぎり一度だけ言及がある。それはヘルベルト・マルクーゼ著『解放論の試み』(筑摩書房、1974年)の訳者あとがきのなかに出てくる。マルクーゼのこの本を「一個の

芸術論として、いやむしろ、芸術運動論として読んだ」と述べたあと、小野はこうつづける。

ということは […] もっと広くというか、歴史全体を人間の、民衆の想像力の造作としてつかむということの、現代の条件のなかでの試みとして読んだということである。ジャンバティスタ・ヴィコやウィリアム・モリスを思い合わせるのは突飛なことであろうか。少なくとも私にはそのようなものとして読まれた。

英文学研究者（というか、むしろ「文化史家」と言うべきか）としての小野が中心課題にしたのがウィリアム・モリスであったのは周知のとおり。そのモリスとヴィーコとをマルクーゼを媒介として接続している興味深くだりである。わたしにはこの連結はけっして「突飛」なこととは思われず、たしかに小野は「歴史全体を人間の、民衆の想像力の造作としてつかむということの、現代の条件の中での試み」としてモリス研究の鉤入れをしたのだし、芸術総体を「レジャー・アーツ」の観点からとらえなおすモリス的発想を民衆の生活史の枠に押し広げたことで、「紅茶を受皿で」をはじめとするイギリス民衆文化研究の展開があった。そして芸術運動の担い手でもあった小野にとって、ヴィクトリア時代の社会矛盾を生きたモリスは「民の知」の系譜学の得がたい先人だった。この点では小野とほぼ同時代に活動した（そしてそれぞれに独自の *Study in the Writing and Acting of History* をおこなった）E・P・トムスン、あるいはレイモンド・ウィリアムズにとってもモリスの位置づけは基本的に同質であったと思う。

このニューズレターの巻頭言を書くに際して、さて、ヴィクトリア朝文化研究の一学徒としてのわたし自身の立ち位置はどこにあるのだろうか、そもそもどういう出発点であったのだろうかとふりかえって見て、まずは学生時代の経験を思い出して書き出しているうちに、以上のような話の成り行きとなってしまった。恩師の小野二郎は多くの仕事をしながらも、いろいろなことをやり残したまま 52 歳の若さで急逝し、わたしはといえば、師から与えられたいろいろな課題を牛歩の歩みで解いているうちに、彼の享年をとうに越してしまった。しかも課題はまだろくに片づいていない。モリスばかり。ラスキンの山も登攀はむずかしい。アーツ・アンド・クラフツ運動と社会主義運動が交錯する 1880 年代イギリスの「前衛」思潮の研究も道半ば。まあ未完で終わるのは必定であろう。それでも追究するかぎりはいずれ「真なるもの」がつかめるという希望は残る。100 年以上前の遠い昔の時代であるにせよ、追究する対象は社会の産物であり、ヴィーコが教えてくれたように、その社会はたしかに人間によってつくられたものであり、したがってその原理はわたしたちの人間精神そのものの変化様態のなかに求めることができるものなのであるから。

~~~~~

## ヴィクトリア朝文化研究のコンタクト・ゾーン―

### 「イギリス美術」への問いから

日本ヴィクトリア朝文化研究学会副会長 山口 恵里子

日本ヴィクトリア朝文化研究学会が創立 15 周年を迎えました。これまでの軌跡にあらためて思いをいたすとともに、副会長の重責を感じております。これから長く続く道を学会の皆様のご教示を得ながら歩いていきたいと存じます。どうぞよろしく願い申し上げます。

*Art and the British Empire* (Manchester UP, 2007) は、ウィリアム・ブレイクの言葉「帝国は芸術に従うのであって、イギリス人がおもうようにその逆ではない」を念頭に置いて、「帝国」をイギリス美術史の周縁ではなく中心に据えて編まれた。論集の編者(Tim Barringer, Geoff Quilley, Douglas Fordham)は、これまで「ブリティッシュ・アート」は、「ブリテン」で制作され、「ブリテン諸島」内部の主題を描いた作品として考えられてきたことを批判する。視覚芸術は、イギリス美術史において、「ブリティッシュネス」や「イングリッシュネス」の表現、称賛、そして構築に根本的な役割を担ってきたという。編者は、テイト・ブリテンやイェール大学イギリス美術センターのようなイギリス絵画のコレクションが、つい最近まで帝国の問題を衆目から隠して周縁的な部分に追いやり、あるいは単純に無視してきたことを糾弾する。こう

した「メトロポリタン」の物語のなかで「帝国」は沈黙を強いられてきたが、美術館の倉庫や文献の註のなかで「帝国」は展示場や本文に影のようにとりついてきたのだった。「帝国」は、ポスト・コロニアル研究のなかで文学、思想史、文化史、人類学等の分野で声を発し始め、大きな学問上の転換を迫ったが、美術史がその声を聞き届けるようになったのは、*Art and the British Empire*の編者によると、1990年代になってからである。いま、「帝国」と対話せずにはその美術の歴史を描くことはできない。編者がいうように、「美術と大英帝国の歴史は、文字通り、作られつつある歴史」なのである。

このような反省のもと、テイト・ブリテンは、昨年11月から今年の4月まで「芸術家と帝国—イギリスの帝国の過去と向き合って」と題した展覧会を開催し、帝国がイギリス美術の制作方法や主題を決定してきた過程を追跡した。出展品は、イギリス最初の植民地であるアイルランドへの侵攻を描いた16世紀エリザベス朝の水彩画から、旧植民地出身でロンドンで芸術を学んだ20世紀の画家、ズルー戦争で英軍が負けた場合を仮定し、英軍の兵士を「奇妙でエキゾチックでプリミティヴ」に展示したスコットランド出身の芸術家の作品まで及び、今なおイギリスに残る帝国の「レガシー」を浮き彫りにしている。『ガーディアン』紙は、イギリス美術の歴史から隠されてきた大英帝国を实体として復活させようとしたこの展覧会は、イギリス人が現在も大英帝国のなかに生きていることを「われわれに」認識させたと評している(*Guardian*, 23 November 2015)。イギリス美術は、ブリテン諸島において制作されたものだけを意味するものでも、「イギリス」人による作品だけを意味するものでもはやない。オーストラリア、アメリカ、ジャマイカ、インド、アフリカ・・・イギリスが関わった地域における芸術実践との関係のなかで、イギリスに現在も残る帝国のレガシーのなかで、「イギリス」美術を問わなければならない。

「芸術家と帝国」展の第1室“Mapping and Marking”に出品されたジョン・エヴェレット・ミレイの《北西航路》(1874)は、北極まで帝国の版図を拡大しようとするイギリスのヒロイズムを称揚した作品である。展覧会の解説によると、老船乗りの前に広げられた地図には、カナダの北海岸の島々を結ぶネットワークと、その網の目が大西洋と太平洋にまで延長された海路が示されている。北西航路は、イギリス海軍が東洋に向かうため探索した、危険に満ちた航路だったこともふまえると、この作品は帝国のアジア進出をも示唆していることがうかがえる。

その北西航路を探索したイギリス海軍を、人類学者のティム・インゴルドは、イヌイットの移動と比較して論じている。イヌイットが旅する土地は彼らの移動の形跡となる「ライン」を織りあわせた網の目となっているが、イギリス海軍が通るコースは経緯度点の連続によって決められている。インゴルドによれば、「イヌイットは旅の道に沿って *along* 世界のなかを通過して移動したのに対して、イギリス人は地球の表面とみなしたものを横断して *across* 航海した」のである(『ラインズ—線の文化史』工藤晋訳[左右社、2014]124 ページ)。ミレイの絵も、ある地点から別の地点へと横断するラインのネットワークのなかで、世界が場所なき空間となってゆくことを暗示する。老船乗りは、みずからの海での経験と技能に基づいて海で生きてきたのだろう。彼の険しい顔つきは、海軍の計測器が探索する地球表面のネットワークに懸念を示しているのかもしれない。

インゴルドは、帝国主義が地球の表面に覆いかぶせた連結のネットワークと輸送ないしは占拠のラインを、居住者の生活が生み出してきた踏み跡(ライン)をずたずたにして蹂躪するものとしてみる。居住者のラインは、生活の道に沿って、世界を通過して、踏み跡を残しながら成長してゆく。したがって、終着点はなく、「すべての「どこか」は、別のどこかに行く途中にある(135 ページ)。他方、占拠のラインは直線的で、権力の結節点においてのみ交わるという。だが、植民地の支配計画がそのようなラインを引くなかでも、異種の文化や言語が、権力が交わる仕方とは別の仕方と接触し、規則的なラインからずれる小道や脇道を作っていたのではないか。その小道は、社会言語学者メアリー・ルイーザ・プラットが論じたような異種の言語や思考が混交するコンタクト・ゾーンを生起させたであろう。コンタクト・ゾーンで、どのようなプロセスで混交が起きるのかを、見つめることが求められているようにおもう。

前出のティム・バリンジャーも、イギリスとインドの芸術が接触したコンタクト・ゾーンに着目した一人である。バリンジャーは、インドをヨーロッパ中世と接合したヴィクトリア朝の言説を「コロニアル・ゴシック」と呼んだ。ヴィクトリア朝では、インドの工芸品はイギリスが失った中世のクラフツマンシップを再現したものとみなされ、インドの村ではヨーロッパ中世的で牧歌的な生活が営まれていると論じられたのだった。だからこそ、そのようなインドの工芸品の劣化を防ぐのも、文明を知らないインドを救うのも、文明国イギリスの役目であるという議論が巻き起こったのだった。このような言説下で、実際、ムンバイ(旧ボンベイ)のターミナル駅はゴシック様式で建築され、「ヴィクトリア・ターミナス」と命名された(現在は改名)。この駅は、帝國的な「輸送のライン」の象徴ではあるが、駅が生起したコンタクト・ゾーンでは、そのような「ライン」の象徴であることを超えた文化の混交が起きていた。

ヴィクトリア・ターミナス駅は、サウス・ケンジントン博物館(現ヴィクトリア・アンド・アルバート博

物館)で訓練された建築家 F. W. スティーヴンズが設計し、装飾にはボンベイ芸術学校の生徒も加わった。その学校にサウス・ケンジントンから派遣された教師の一人に、ジョン・ロックウッド・キプリング (ラドヤード・キプリングの父) がいる。イギリス政府は、マドラス、カルカッタ、ムンバイ、ラホールに芸術学校と博物館を建設し、サウス・ケンジントンでヘンリー・コールが進める芸術・デザインの国家的プロジェクトを植民地に普及しようとした。芸術学校と博物館は本国とのあいだにネットワークを形成し、このなかで芸術学校は生徒たちにイギリス人のテイストに合った工芸品を制作させ、博物館は (イギリスにとって価値のある) インドの資源を展示したのである。キプリングもこのネットワークのなかに身を置いた一人だが、彼は、サウス・ケンジントン式の教育をしながらも、インド固有の装飾を重視した授業をカリキュラムに組み入れ、地方に特有な装飾や工芸品を尊重し、職人の技法を伝承させる教育も行った。キプリングが地方に赴いてスケッチした職人の素描が多数残っている (図)。これらは、「ライン」から離れたコンタクト・ゾーンで彼と職人が接したときの記録である。みずからも「アーティスト・クラフツマン」だったキプリングは、職人の身体技法、道具、作業所を注視する。職人もキプリングの前で普段の作業を続けている。ふと彼を見上げて、笑みを見せる職人もいる。



ジョン・ロックウッド・キプリング、ヒマーチャル・プラデーシュ州 (インド) の木彫り師 (1870年), 紙, ペンとインク, 36 x 25.7cm. ©Victoria and Albert Museum, London

「芸術家と帝国」展には、オーストリアの画家ルドルフ・スウォボダが描いた「本物のアーティザンたち」の肖像画も出品された。モデルとなった男たちは、1886年にロンドンにおいて開催されたコロニアル・インディアン博覧会で、工芸品制作を実演するためにインドのアグラから連れてこられたのだが、じつはその「本物の職人たち」はアグラの監獄に入れられていた収監者だった。当時、インド政府は更生教育の一環として、「伝統的な」手工芸品を監獄で作らせていたのだった。中世的な村で作られていたはずの工芸品が、植民地のベンサム的な監視のもとで都市の監獄で作られていたのである。ヴィクトリア女王は、「ネイティヴ」の職人たちをウィンザー城での昼食会に招き、彼女の統治下に置かれた「ピクチャレスク」な人々と直接接した後、スウォボダに8名の「職人」の肖像画を注文したのだった。スウォボダも女王の意図を汲み取り、彼らを「職人」ではなく、エキゾチックなキャラクターとして描いている。この肖像画もまた、コンタクト・ゾーンで制作された作品である。

ヴィクトリア朝は、このようなコンタクト・ゾーンをブリテン諸島内外に出現させ、言語、思考、そして文化そのものの異種混交を無数に生じさせた時代である。まさにコンタクト・ゾーンが集積した場であるこの日本ヴィクトリア朝文化研究学会は、多様な混交の過程を、多様な視点から見つめる「場所」となってきた。その場所では、いくつもの研究が出会い、接続し、触発しあうコンタクト・ゾーンがたくさん生まれた。今後も、異種の研究が接触し、「イギリス」そのものを問うようなコンタクト・ゾーンが生まれ、独自のラインを学界に描いていこう。これまでの軌跡にさらなる軌跡を付け加える多くの手のひとつとして、力を尽くしたいとおもう。



## 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2015 年度総会報告

日時：2015 年 11 月 21 日（土） 17：45～18：00

場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館 101 室

### I 報告事項

#### 1. 2015 年度活動報告について

運営委員会（1 回目、8 月；2 回目、2016 年 1 月開催予定）

理事会（11 月、大会の前日）

編集委員会（1 回目、2 月；2 回目、7 月；3 回目、8 月）

会員名簿の更新（1 月、8 月）

第 16 回大会シンポジウム及びラウンドテーブルの企画募集（7 月～12 月）

#### 2. ニュースレターについて

第 14 号を 5 月に発行

#### 3. 学会誌について

第 13 号を 11 月に発行

#### 4. 全国大会関係

2015 年 11 月 21 日 第 15 回全国大会開催（同志社大学）

### II 審議事項

#### 1. 2014 年度会計決算・監査

報告の通り了承

#### 2. 2015 年度予算案

予算案を了承

#### 3. 理事・役員の変更

役員名簿（案）を了承

#### 4. 会則の改正

- ・ 役員、理事の選出等にかかわる規約改正（資料5 第6条4）について審議され、改正案が了承された。
- ・ 非会員の交通費等支給規定の改正（1の支給対象を「特別講演等」とすることに変更）が提案され、了承された。

#### 5. 2016年度大会について

日本女子大学 目白キャンパスで2016年11月26日（土）に開催予定

#### 6. その他

特になし

### III 優秀論文賞の表彰式

優秀論文賞受賞者 町本亮大氏に賞金5万円と賞状が贈られた。

## ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆2014年度決算報告書(2014.4.1～2015.3.31)◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

#### 収入の部

単位：円

| 項目     | 金額        | 備考                 |
|--------|-----------|--------------------|
| 前年度繰越金 | 5,644,664 |                    |
| 利子     | 591       | ゆうちょ銀行             |
| 出展料    | 25,000    | 5社                 |
| 学会費    | 1,932,000 | 一般会員 276名、学生会員 12名 |
| 合計     | 7,602,255 |                    |

#### 支出の部

| 項目         | 金額        | 備考                                               |
|------------|-----------|--------------------------------------------------|
| 通信費        | 76,794    |                                                  |
| 大会経費       | 407,486   | 大会会場、プログラム製作費、ポスター、郵送費、アルバイト料、茶菓子代など             |
| N. L.作成費   | 133,300   | カラー印刷代(119,800)+作成補助費(9,000+4,500)               |
| 学会誌作成費、郵送費 | 924,912   |                                                  |
| 学会誌用図書費    | 126,073   |                                                  |
| 振込手数料      | 33,686    | (振込用紙印字代 1,102を含む)                               |
| 消耗品費       | 8,639     | 文具等                                              |
| 役員会費       | 27,320    | 理事会会場費、弁当代                                       |
| 役員交通費      | 80,000    | 4名×20,000                                        |
| 非会員謝礼、交通費  | 130,000   | 特別講演料(1名)、謝金(4名)                                 |
|            |           | インターネットサービス継続(30,844)+NL                         |
| その他        | 145,094   | 送アルバイト(3,000×2名)+NL 発送交通費(2,280)+105,970(懇親会補助費) |
| 合計         | 2,093,304 |                                                  |

次年度繰越金 5,508,951

以上のとおりご報告いたします。

2015年7月8日

会計

大島 浩

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2015年7月15日

会計監査

河村 民部





## 第16回大会のお知らせと研究発表の募集

第16回大会は、2016年11月26日（土）筑波大学東京キャンパス文京校舎で開かれる予定です（本誌7頁、総会報告5の日本女子大学から会場校が変更になりました）。シンポジウムの題目は「「ポスト・ヴィクトリアン」のヴィクトリアニズム」（仮題）で、パネリストは現在交渉中です。

ラウンドテーブルは「オリエンタリズム再考」（仮題）（提題者：栗田禎子氏）が予定されています。特別講演は坂本優一郎氏（大阪経済大学）にお願いすることになっています。題目は「ヴィクトリア朝のらびとと投資文化」（仮題）です。どうぞ、振るってご参加ください。

研究発表（発表時間30分、質疑応答15分）を希望する会員は、発表要旨（400字）に略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送で事務局までお送りいただくか、あるいは添付ファイルで学会のメールアドレスまでお送りください。メールの場合、送信後3日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いいたします。

### 筑波大学 東京キャンパス 文京校舎



アクセス：営団地下鉄丸ノ内線 茗荷谷（みょうがだに）駅下車「出口1」より徒歩5分

**\* 研究発表応募の締切は2016年7月5日（火）必着です。**

# 第17回全国大会シンポジウムおよび ラウンドテーブルの企画募集

2017年11月下旬に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第17回全国大会（開催場所と日時は今年の8月に決定される予定です）におけるシンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ2時間30分程度（15分間の休憩を含む）の時間枠を予定しております。締切は2016年12月末日必着といたします。

シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関する学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については運営委員会（2017年1月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締切：2016年12月31日（土）必着
2. 申請方法：様式は問いません。下記に示す申請書必要記載事項を記入して、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局までメールにてご提出ください。下記の「シンポジウム・ラウンドテーブル企画申請書（Excel形式）」を利用していただいても結構です（<http://www.vssj.jp/conferences.html>からダウンロードしてお使いください）。
3. 申請書必要記載事項
  - ① シンポジウム／ラウンドテーブルのタイトル
  - ② 趣旨（400字程度）
  - ③ 企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）
  - ④ プログラム
    - 1) 司会（氏名、所属）
    - 2) 報告者（氏名、所属）
    - 3) 各報告者の題目および報告要旨（200時程度）
    - 4) タイムテーブル（全体で2時間30分程度〈休憩含む〉に収まるように計画してください）※シンポジウム／ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。
4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局  
〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1 日本女子大学英文学科佐藤和哉研究室  
E-mail: [victorianstudies.japan@gmail.com](mailto:victorianstudies.japan@gmail.com)

## 編集後記

この度、Newsletterの編集を担当させていただくことになりました。また、今号から従来の印刷による配布から電子媒体での配信となりました。前任者の高田実先生によるカラーで、多くの読み物が掲載された会報から大きく形をかえることとなります。この形式で可能な限り充実した紙面作成を心がけてまいりますので、何卒よろしく願い申し上げます。

今号では、巻頭言としまして、新会長・川端康雄先生と、新副会長・山口恵里子先生のエッセイを掲載いたしました。お忙しいなか、玉稿をお寄せいただいたお二人と、会計報告等の情報ならびに大会に関する情報をお知らせいただいた大島浩先生と佐藤和哉先生に感謝申し上げます。（市川 千恵子）

発行：

日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局  
〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1  
日本女子大学英文学科 佐藤和哉研究室

Tel: 03-5981-3560

E-mail: [victorianstudies.japan@gmail.com](mailto:victorianstudies.japan@gmail.com)

発行日： 2016年5月1日